近代英語協会ニューズレター

2014 年 (平成 26 年) 8 月 20 日

協会ホームページ http://www.modernenglish.jp/index.html

1　第 31 回大会について

去る 6 月 28 日(土)に、日本大学文理学部において開催され、1 件のシンポジウム、5 件の研究発表、及び中野弘三先生による特別講演が行われました。発表者と司会者の皆様、お疲れさまでした。ご参加いただいた会員の皆様には、熱心にご清聴いただき、また、貴重なコメントや質問をお寄せいただき、誠にありがとうございました。40 名の方が出席された懇親会では、諸々の話題に花が咲き、瞬く間に 90 分が過ぎゆきました。

今大会の参加者数は 83 名でした。新事務局となり初めての大会、多くの皆様にご参加いただき、安堵いたしました。どうか会員の皆様には、次回も万障お繰り合わせの上ご出席を賜りますようよろしくお願い申し上げます。なお、年度別参加者数は次のとおりです。

年度	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
大会	84	約 100	約 80	72	85	79	84	83
懇親会	32	45	25	39	38	40	39	40

2　第 32 回大会について

次回大会は、2015 年 6 月 27 日(土)、愛知学院大学日進キャンパスにおいて開催を予定しております。シンポジウムは、現在企画中で、テーマ・講師等、詳細はニューズレター冬号でお知らせいたします。

個人研究発表の締め切りは 2015 年 1 月 31 日(土)となっております。発表をご希望の方は、(a) 発表題目と 300 字程度の要旨、(b) 氏名・所属・職位・略歴・連絡先（住所、電話番号、e-mail アドレス）を別文書として作成し、下記宛てにお申し込み下さい。

（ア）電子メールによる応募

・(a) MSWord 文書、及びその pdf.ファイルを添付。

・(b) MSWord 文書のみ。

・打ち出し原稿郵送不要

宛先　　hosaka@chs.nihon-u.ac.jp

（イ）郵送による応募

・MSWord で作成された(a), (b)を入れたフロッピーディスクまたは CD-R

・打ち出し原稿

宛先　〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40

日本大学文理学部英文学科　保坂道雄

3　理事の交代について

2015 年 3 月 31 日をもちまして、家入葉子氏、大門正幸氏(1 期 2 年)、田中智之氏、中尾佳行氏、藤原保明氏、松原史典氏の 6 名理事が任期を満了し退任されます。長きに渡り協会の発展にご尽力頂き、誠に有り難うございました。なお、後任の理事として、山田宣夫氏（目白大学）、中村不二夫氏（愛知県立大学）、大沢ふよう氏(法政大学)、保坂道雄氏（日本大学）、水野和穂氏（広島修道大学）が就任されます。任期は、2015 年 4 月 1 日～2019 年 3 月 31 日の 2 期 4 年です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

4 『近代英語研究』第 30 号の発行について

第 30 号は予定どおり刊行され、大会ご出席の会員の方々には当日お渡しいたしました。当日ご欠席の会員の方々には、このニューズレターとともに同封申し上げました。

5 『近代英語研究』第 31 号の原稿募集について

第 31 号 (2015 年 7 月発行) の投稿締め切りは 2014 年 9 月 15 日 (土) となっております。奮ってご応募ください。審査は匿名で行われます。投稿規定・応募要領等は、『近代英語研究』の巻末、または協会ホームページ左下「出版物」の中の「投稿要領」をご覧ください。

電子ファイルによる応募は、次のメールアドレスにご投稿ください。

sme.mea.japan@gmail.com

郵送による送付先は、次のとおりです。

〒192-0393
東京都八王子市東中野 742-1
中央大学文学部英語文学文化専攻
堀田隆一

6　近代英語協会最優秀新人賞ならびに優秀学術奨励賞の選考結果について

本年度は、3 名の応募者がありましたが、編集委員会による厳正なる審議の結果、残念ながら該当者がございませんでした。次年度の応募をお待ち致しております。

なお、既にご案内のとおり、賞には、最優秀新人賞と優秀学術奨励賞の 2 種類があります。若手による当該年度の掲載論文の中から、前者は特に秀でている論文に、後者は、最優秀新人賞には至らないが将来性を感じさせ優れていると評価された論文に与えられます。論文応募の際、「執筆者情報ファイル」の該当欄に（√）をご記入いただくだけで結構です。選考対象は、「協会誌への掲載が可となった、投稿締切日時点で 37 歳以下の、または修士号取得後 10 年以内の執筆者による論文のうち、原稿応募時に「執筆者情報ファイル」において賞の選考を希望する意

思が表明されていた論文」（選考規程第２条より）です。最優秀新人賞には表彰状と記念品が、優秀学術奨励賞には表彰状が授与され、その栄誉が讃えられます。

7　会費納入のお願い

本年度の大会資料をお届けした際、会費振込用紙を同封致しました。既に納入頂きました会員の皆様には、心より御礼申し上げます。協会の円滑な運営のために、会費収入は欠かすことができません。会則により３年間未納の方は自然退会となります。残念ながら、平成 25 年度末にて、８名の会員の方が自然退会となりました。何卒、会費納入の程、お忘れなきようお願い申し上げます。

8　30 周年記念論文集出版報告

30 周年記念論文集編集委員長
中川　憲

1983 年に近代英語協会が発足して 30 年が経ちました。学会創立 30 周年を記念する行事の一環としての論文集が無事完成しました。30 周年記念論文集を出そうとの話が持ち上がったのは、2011 年春の福岡女子大学で行われた理事会の席上でした。あれから 3 年、本年 2014 年 5 月に、皆様のご協力のおかげで立派な論文集が出来上がりました。手にとって御覧になった方はその重厚な仕上がりに驚かれたことと思います。

積極的に海外に研究成果を発信するために全編英語で統一しました。どんな反応が内外の研究者から返ってくるかが楽しみです。

特別寄稿 3 本、第Ⅰ部 形態論･語彙論 5 本、第Ⅱ部 統語論 8 本、第Ⅲ部 意味論･語法･語用論 5 本、第Ⅳ部 文体論 6 本の計 27 本の構成です。収録論文数が、10 周年が 38 本、20 周年が 35 本、そして 30 周年が 27 本とだんだん少なくなってきたのは、今回の最初の目標が 40 本だっただけに、残念でした。40 周年に向けて学会活動は進行中です。次代を担う学会員の奮起に期待したいところです。

たくさんの方々のお力添えをいただきました。そのことについて触れさせていただきます。先ず、ご執筆いただいた学会員の皆様には玉稿をお寄せくださいまして、まことにありがとうございました。また、査読の労を取られた編集委員の先生方には、公務でお忙しい中大変お世話になりました。次に、献身的に編集作業に当たられた今林修先生と大野英志先生、今林先生にはすべての版下をプロもたまげるほどの緻密さで作成していただきましたし、大野先生には執筆者との修正の為のこまごまとしたやり取りをすべて行っていただきました。続いて、20 周年記念論文集の編集経験を元に援助を惜しまれなかった 30 周年記念事業事務局長中村不二夫先生、中村先生には長期的展望に立っての寄付金集めの段取りに始まり出版社への支払いに至るまでご配慮いただきました。言い換えると、先生が策定された「刊行までの流れ」に基づき最初から最後までとことんご尽力いただきました。加えて、前会長の米倉綽先生には出版社

との交渉の糸口を見出してくださいました。最後に、出版を快くお引き受けいただいた英宝社の佐々木元社長と宇治正夫氏のご協力に感謝しなければなりません。

本書が出版できたのは皆様のお力添えの賜物と存じます。改めてこの場を借りて衷心より御礼を申しあげます。

9 近代英語協会 30 周年記念事業決算報告

30 周年記念事業事務局長

中村不二夫

このたびの記念事業に際し、会員各位から多大なる寄付金を頂戴し、心より御礼申し上げます。お陰をもちまして、出版史に残る美しい記念号を上梓することができました。

決算報告は、別添のとおりです。会計監査の山田宣夫先生（目白大学）に監査いただいた後、電子メールによる理事会の承認を経ました。

昨年 6 月時点では寄付金額が思うように伸びず、万一の場合不足分を一定限度額まで一般会計から補填させていただくことを、愛知大学大会での総会で承認していただきました。しかし、その後、次々にご寄付をいただき、9 月末時点では、20 周年時とほぼ同額の寄付金が集まりました。これにより、30 周年記念号は間違いなく出版できると確信するに至りました。米倉綽前会長からの 150,000 円を筆頭に、1 名から 50,000 円、22 名から 30,000 円、1 名から 20,000 円、18 名から 1 万円、8 名から 5,000 円、2 名から 3,000 円、1 名から 2,000 円をご寄付いただきました。このことがどれほど見通しを明るくしたか、測り知れません。（本来ならば御芳名をお示しすべきところ、個人情報と判断し、人数のみに止めました。）

一方、記念号は予想よりも遙かに安く上がりました。その理由として、米倉前会長から英宝社に破格の値段で出版してくださるようお口添えがあったこと、今林修先生と大野英志先生が完全版下を作成されたこと、掲載論文数が 27 編で、20 周年より総ページ数が大幅に少なかったこと、刷り上がり部数を 300 部としたこと、費用上昇の原因となる特殊製版がごくわずかであったことが主な理由として考えられます。あのように気品ある研究書を出版していただきながらこれほどの残が出たことに、私自身大変驚いています。余剰金は、一般会計に入れず、40 周年の財源の一部として事務局が保管するようお願いしてありますので、追って理事会に諮られると存じます。

30 周年事業の構想が持ち上がって以来 3 年強の歳月が経過しましたが、無事に出版の運びとなりましたことに安堵しております。その間、会員の皆様には惜しみないご協力を賜り、誠にありがとうございました。ここに衷心より御礼を申し上げます。

残暑はまだまだ続きます。皆様には、くれぐれもご自愛いただきますようお祈り申し上げます。

近代英語協会 30 周年記念事業決算報告

（単位　円）

収入の部		支出の部	
口座開設申込金（一般会計より）	1,000	30 周年記念号 印刷・製本・発送費	1,115,057
寄付金*1	1,103,450	通信費	14,505
55 名*1	(1,113,000)	消耗品費	220
口座徴収料金	(△9,550)	一般会計口座への移管*2	5,000
執筆者負担金	683,510	雑費	20,900
30,000 円 x 21 名 + 20,000 円 x 3 名	(690,000)		
口座徴収料金	(△6,490)		
計	1,787,960	計	1,155,682

*1 2013 年 5 月に誤って 30 周年記念口座に振り込まれた年会費 5,000 円が含まれている
*2 誤振込の上記 5,000 円を 2013 年 7 月に通常口座に移し替えたもの

差引残額　632,278

次年度繰越金内訳

振替口座	617,683
現金	14,595
計	632,278

以上のとおりご報告します。

2014 年 7 月 10 日　30 周年記念事業事務局長　中村不二夫　印

監査の結果、本決算報告は適正であると認めます。

2014 年 7 月 14 日　監事　山田宣夫　印

10　追悼

本協会の初代会長荒木一雄先生が昨年 1 月にご逝去になりました。このたび、中野弘三先生より追悼文をご寄稿いただきましたので、ここに掲載させていただきます。先生の生前のご功績を讃えるとともに、改めてご冥福をお祈り申し上げたいと存じます。

荒木一雄先生を偲んで

名古屋大学名誉教授　中野弘三

荒木一雄先生と私との師弟の関係は、学生として先生にはじめてお目にかかって以来半世紀を超えており、私の人生の大半を師として支えて下さった先生が亡くなられた時には、親を失った時に似た大きな喪失感を味わった。

半世紀を超える長い間お付き合いのあった先生の思い出は簡単には語りきれない。近代英語協会との関わりで言えば、思い出すのは、先生が近代英語協会初代会長を務められた協会発足当初の 1980 年代初めの頃であるが、思い出の始まりは、それよりさらに 20 年前の 1961 年私が大阪市立大学大学院に入学した時だった。その時先生は大阪市立大学文学部に在職され、英語学担当の大学院教官であった。その当時先生は日本英文学会機関誌『英文学研究』の編集

委員をはじめ、辞典の編集、執筆、研究社『英語青年』、大修館『英語教育』への連載記事の執筆など、大変精力的にお仕事をしておられた。

荒木先生と出会えたことは、私にとって大変な幸運であった。先生から直接学問研究の手ほどきを受けることができたからだ。お忙しい中、しばしばお宅に招いて下さり、学問研究の方法や学会のことなど、いろいろと私に教えて下さった。特に学会での発表や、『英文学研究』のような学会機関誌への投稿を強く勧められ、そのために種々アドバイスをして下さった。英語学の研究や学会活動についてほとんど無知と言ってよい私にとって、この時の先生の教えは大変に貴重なものあった。

30 代後半から 40 代後半まで大阪市立大学で過ごされた 14 年間は、英語学研究者としての荒木先生にとって最も充実した時期ではなかったかと思われるが、一方で、先生は仕事に熱中されるあまり、過労により持病の眼底出血や胃腸病が悪化し、深刻な状況になられることもままあった。しかし、その都度病気の回復に専念され、危機的状況をうまく克服されて、91 歳まで長寿を保たれたのも、先生の尊敬すべき賢明さだと私は常々考えている。

荒木先生は 1969 年に名古屋大学文学部に移られた。当時まだ関西の大学に勤めていた私は、先生の名古屋大学へのご転任により先生とは少し疎遠になりかけていたが、それから間もなく先生のご紹介により私自身も名古屋大学に移ることになった。名古屋大学に移った当初私は教養部に所属していたが、1982 年に文学部に移り、荒木先生が教授としておられた英語学講座の助教授として、1985 年 3 月に先生が退官されるまで約 4 年間ごく身近で仕事をさせていただいた。

先生が名古屋大学ご在職中には、日本英文学会理事をはじめ、日本英文学会中部支部長、日本英語学会理事などいくつもの学会の重職に就いておられた。しかし、先生の学会関係のお仕事で最も思い出深いのは、近代英語協会の創設に中心的役割を果たされ、同協会創設後の初代会長を務められたことであった。近代英語協会は、荒木先生が東京学芸大学の宇賀治正朋先生と広島大学の河井迪男先生のご協力を得て、三人の先生方が発起人になって 1983 年に発足したものである。この頃私は先生のおられた英語学講座の助教授を務めていたために、荒木先生が協会の初代会長を務められた時には私も事務局長を仰せつかり、協会の運営のお手伝いをさせていただいた。先生は 10 年近く会長を務められたが、その間事務局長として学会運営のお手伝いをさせていただいたお陰で、学会の仕事を様々経験させていただき、また他大学の多くの先生方の知遇を得た。このことは後に私自身が学会運営の責任者になった際に非常に役立った。

近代英語協会創設に加え、先生は機関誌『近代英語研究』の創刊にも大きく貢献された。同誌創刊号は 1984 年に発刊され、その後協会と機関誌ともに存続、発展を続け、協会会員の皆様がご存じのように、昨年には創設 30 周年を迎え、本年 30 周年を祝う記念論文集（英宝社刊）が刊行された。近代英語協会の設立と機関誌の創刊は荒木先生が日本の英語学界に残され

た大きな功績の一つであり、創設当初からお手伝いをさせていただいた私もそれを誇らしく思っている。

荒木先生のご研究の主要なテーマは英語音韻史であり、長年力を注がれたその研究成果を英語学大系第 10 巻『英語史 III』（1984 年大修館書店刊）に集大成されている。この研究は先生が 20 年以上の歳月を費やして多くの先人の研究成果を丹念に検討され、その成果に理論的分析を加えた実証的かつ理論的研究であり、英語音韻史研究に重要な貢献を成すものとして学会でも高く評価されている。

また、先生が研究生活の前半で取り組まれた英語関係詞の研究も評価が高く、先生が少壮気鋭の学者として著された英文法シリーズ第 5 巻『関係詞』（1954 年研究社刊）は、永らく英語関係詞研究者必読の書とみなされ、今もその古典的価値は失われていない。先生は、同書刊行後、さらに 10 年余を関係詞研究に費やされ、その成果を学位論文としてまとめ、1967 年に東京教育大学から文学博士の学位を取得された。

そのほか、『英文法辞典』（1959 年三省堂刊）、『新英語学辞典』（1982 年研究社刊）、『現代の英文法』全 12 巻（1976 年より刊行開始、研究社刊）、『現代英文法辞典』（1992 年三省堂刊）、『英語学用語辞典』(1999 年三省堂刊)など重要な英語学辞典、研究叢書の編集と執筆に努められた。さらに、多くの英和辞典、語法辞典の編纂にも携わられ、私が多少ともお手伝いした記憶がある辞典だけでも、『新選英和辞典』[共編]（1981 年小学館刊）、『英文法用例辞典』（1984 年研究社刊）、『英語正誤辞典』（1988 年研究社刊）など、様々な辞典がある。

また、先生は、名古屋大学などでの大学および大学院教育の質の向上に尽力され、すぐれた英語学研究の成果によりわが国における英語教育、研究の発展向上に貢献をされたことが認められ、1997 年に勲 2 等瑞宝章を受章された。

荒木先生は、すぐれた英語学者である一方で、研究者養成にも力を尽くされた。大学院生や若い研究者が研究成果を発表する場を少しでも広げようと、名古屋大学英語学研究室機関誌 *Linguistics and Philology* を創刊されたのも、先生の研究者育成の強いご意志の現れと思われる。先生は大阪市立大学、名古屋大学の他に甲南大学、京都外国語大学の大学院で教鞭をとられたが、先生の門下からは日本の英語学界で活躍する人材が数多く輩出している。

荒木先生の指導法は教室での講義や演習のみに依るものではなく、仕事をさせることによって育てるという独特のものであった。先生は多くの英語学辞典、英和辞典、語法辞典の編纂に携わられたが、どの辞典の場合も指導生の何人かを執筆者に加え、執筆という作業を通じて英語の研究法を実践的に学ばせるよう心がけておられた。私も大学院生の頃から先生が主宰された様々な仕事のお手伝いをさせていただいた。とりわけ先生が監修された『現代の英文法』全 12 巻中の 1 巻『助動詞』（1977 年研究社刊）の一部を執筆させていただいたことは私のその後の英語研究の方向に大きな影響を与えた。この書物の執筆に当たって先生のご指導のもと英

語の助動詞について勉強したことがきっかけとなり、その後英語の法助動詞が私の中心的な研究テーマとなった。

長年にわたり先生のお側にいていつも感じたことは、先生の周りには人が大勢集まるということであった。先生の学問、学風を慕ってという人も多いが、先生の闊達で朗らかなお人柄に惹かれてという人もたくさんいたように思う。先生の還暦、古希祝賀会、叙勲をお祝いする会などには実に多くの人が集まり、ときに参会者が予想を超えて会場から人があふれ、世話役が冷や汗をかくこともあった。

荒木先生が多くの人から愛された理由の一つは、先生が話し好き、話し上手なことである。先生のお話しは、学会その他の会合でされる挨拶ではほとんど常に、そして講義や講演でも時折、（時には駄洒落を含む)ユーモラスなアドリブが入り、愉快で人を飽きさせないものであった。先生のお宅に伺うと、お元気な頃は下世話な話題から学問の話まで話題が尽きず、何時間もお話を伺うこともしばしばであった。

公私にわたってお世話になった荒木先生の思い出は尽きない。学生として先生に学問研究の手ほどきを受けた頃の思い出、名古屋大学で教官として先生とともに英語学研究室の運営に当たった頃の思い出、先生のお手伝いをして近代英語協会の運営に携わった頃の思い出など、どれを取り上げても懐かしいものばかりである。それだけに、その思い出の中心である先生が亡くなられたことは、まことに寂しい限りである。喜寿を超えた私もいずれ遠くない将来に先生のもとに行くことになるであろうが、今はただ先生のご冥福を心からお祈り申し上げたい。

* * * * * * * * * * * * * * *

新事務局の最初の大仕事である『近代英語研究』30 号の出版、及び第 31 回の大会運営を無事終わることができ、安堵しております。これも会員皆様のご協力によるものと、心より感謝申し上げます。また、本ニューズレターでも報告がありました 30 周年記念論文集（*Studies in Modern English: The Thirtieth Anniversary Publication of the Modern English Association*, 英宝社）につきまして、是非、会員皆様所属の図書館・研究室等にてご購入をお願いできれば幸いです。何卒よろしくお願い申し上げます。

協会の運営に関して、お問い合わせやご連絡等ございましたら、お気軽に、以下の連絡先にお願い致します。残暑厳しき折、どうか皆様ご自愛下さい。

- 協会誌について
  〒192-0393
  東京都八王子市東中野 742-1
  中央大学文学部英語文学文化専攻
  堀田隆一
  sme.mea.japan@gmail.com
- その他全般について
  〒156-8550
  東京都世田谷区桜上水 3-25-40
  日本大学文理学部英文学科
  保坂道雄
  hosaka@chs.nihon-u.ac.jp